

計算の穴を貫け
凜S マキノ

ふたなりサキュバス。

そんな冗談みたいな存在が今このプロダクションを支配している。この騒動を仕掛けた誰かさんは、無理やりプロダクションのアイドルたちを全員ふたなりサキュバス化させてその中からリリムスファイアって存在になれる逸材を見つけようと目論んでいるらしい。そう、千秋から教えてもらった。

「やめて、もう射精できない！出ないよおおお！」

「ハハッ、アタシはまだ満足してないよ！？ほら、こうしてこう・・してやると、さ！」

「いやあああ、なんで勃起しちゃうのおおお、もう出ないのにいいいい！！！！！」

「さあ、気張りな、限界までさあ！」

今も私が通っている渡り廊下の下では涼が誰かアイドルを馬乗りになって犯している。その子が誰か気になったけど、私が出会ったことがある子だけでも100人以上を抱えている巨大プロダクションの中で、ちよつとここから髪の色と喘ぎ…とい・・か叫び声だけじゃさすがに分からない。

「ひやあああ、またでる、でちゃうううう！」

「あんん！たまらない、ねえ！もつともつとイクよッ！」

多分あの様子じゃ涼も快樂に飲まれて、理性の大半を消失してしまっただらう。

それも仕方ないこと、こんな肉体で外界と隔離された私たちにとって精子は貴重な生きる糧だ。でも、そこに落とし穴がある。精子を膣に注がれたり口から飲み干すと、頭が熱くなつて理性が蕩けて行く。もつと欲しい、もつと欲しいという感覚が身体を駆け巡る。そうしてふたなりサキュバスらしい快感をおさぼり始めると、もうおしまいだ。

徐々に理性は削げ落ち、まるでゾンビみたいに快樂だけを食らい続ける状態になってしまい、外見も徐々に尻尾や翼が生えた姿に変貌していく。実際は私たちも尻尾だけなら生きてきちゃっているんだけど、隠すことができるのでまだマシな状態らしい。

「ひよつとしたらいずれ私も・・・」

そんな恐ろしい予感が思わず口から洩れてあわてて頭を振る。

私は大丈夫。加蓮も奈緒も一緒にいて、人間のまま生き残るために一緒に暮らしている。だから大丈夫、ふたなりサキュバスなんて変なものにいつまでもなつていても構わない。この力がないとここでは生き延びられないけど、千秋が言うにはこの騒動を起こした張本人はプロダクションのどこかにいるらしい。

それを絶対に見つけ出してこんなふざけたことを終わらせてやるんだ。

「それで、どうでしたか？」

淫靡な瘴気、淫気が満ちた空間。鷹富士茄子は自分の前に立つふたりの少女に満面の笑みで問いかけた。

「客観的な証拠は薄い、というか私にも分析方法が分からないけれど。清良に確認したところ渋谷凖はリリムスフィアに相応しい才覚とザーメンの持ち主らしいわ」

「私もその意見に賛成です。凖さんと千秋さんのセックスを詳しく拝見しました。が、先にふたなりサキュバス化していた千秋さんにも負けない淫靡さを備えていました。適応と学習の早さ、そして美しさを感じました」

「へえ、興味深いですね」

ふたりの少女、八神マキノと古澤頼子の報告に満足げにうなずいて、茄子は目を細めた。

「じゃあ、早めにふたなりサキュバスとしての倫理観に堕ちてもらわないと、ですかね。私たちの幸せのために♪」

「なるほど。ある種の強制力が必要ね」

それはつまり、渋谷凖をよりセックス漬けにして理性を溶かしてしまおうということだろうと、マキノは理解した。

ならどうすれば良いだろうか？その辺りにいる理性が溶けてしまったアイドルたちをぶつけてみるのも良いが、現実性が担保できない。だとするのならば、答えは明白だった。

「ならば私が凜を犯してくるわ」

「あら、本当ですか？」

「マキノさんが？思いきりましたね・・・」

自分自身が犯されてしまうかもしれないという危険性に身をさらすという言葉に頼子が思わずマキノの方に向き直ると、マキノはメガネをクイっと上げてこともなげな様子。

「別にリスクの高いことではないわ。私は彼女を観察し、そのデータを取り続けてきた。だから私は彼女の弱点や未開発の快感をいくつも知っている。それに・・・」

それに？と頼子がマキノを促す。その瞳はすでに自分が口にすることを見通しているようだったが、気にせず彼女は続けた。

「渋谷凜が本当にそんな逸材なら、このふたなりサキュバスがセックスバトルで勝った際のルールを利用して、是非とも彼女を手元において観察し、データを取りたいもの」

「うーん、その野心を隠さないやる気な姿勢、良いですねえ。ではマキノさんに任せちゃいませう、幸運があることを祈っていますよ」

どこまでも自信を隠さぬマキノの様子にうれしそうな茄子。だが傍らの頼子は何も言わなかった。

「では、早速準備をしてくるわ。計算通り、美しく終わらせて来る。吉報を待っていてね」
「はーい。行ってらっしゃい」

そう見送る茄子の側に立ちつつ頼子はひとり思案する。

リリムスファイア。サキュバスたちのいる夢の世界ではなく、現実の世界の住人として生き続けながらふたなりサキュバスたちのリーダーとなる存在。その候補と目された渋谷凜の潜在能力は表層に現れているものだけではないはず。マキノがいかに技巧に優れてデータの裏付けもあるといっても、まだ分からない部分は多いのではないだろうか。

・・ひよっとしたら茄子などはそういうトラブルすらも楽しんでいるのかもしれない。自分のように今回の騒乱が起きてからふたなりサキュバスに目覚めたものとは違う彼女の思考は、頼子にはまったく読めない。ただ、今はマキノの成功を祈るしかないのだろうと彼女は思うことにした。

私たちが強制的にふたなりサキユバス化させられて混乱の渦中に落とされたとき、この社屋はぐちゃぐちゃになった。楽屋を出たら廊下につながってるはずが宣材写真の撮影スタジオにつながっていたり、玄関を出ようとしたら記者会見場につながったり。私たちが拠点にしている応接室も、本来なら本館と新館をつなぐ連絡通路の扉の先に存在していた。今日も見回りを終えて私たちの領域に近づくものがないことを確認したと想像していたんだけど、違ったみたい。

「マキノ、来てたんだ」

「ええ。少し貴方に用事があった。加蓮ともお話をしたかったんだけど、それよりも優先順位が高いことなの」

「どうやらさつき見かけた涼と違って理性は残っているみたい。でもその分、明確な目的をもって動いているから厄介そうだ。」

「マキノは不用意に単身ここに来るようなことはしないはず。だってここは扉の向こうには加蓮や奈緒がいて、もし彼女たちが出てきたら一気にマキノは形勢不利になる。なのにここにいるということは……私は警戒を解かず、不用意に近づかないことにした。」

「へえ……何の用？用件次第では聞くけど」

「話し合いだけで済むなら効率的で助かるわ。そう、簡単にいうと一緒に来て欲しいのよ。それで現実側のふたなりサキユバスの指導者、リリムスフィアになるべく努力をしてみよう。そうしたら別に加蓮や奈緒も巻き込まれないし、貴方を私たちがバックアップするわ」

「ふうん、なるほど。そんなこと考えているんだ」

「そうよ、現状に適応したらそうやって生きていくしかない」

そういうことかと私は納得する。マキノが出会った事象やそれを受け入れた過程は分からない。ただ、こないだつ終わるかも分からない狂乱がずっと続いていて現状がどうにもならない中、そういう受け入れ方をする人もいるだろうということは理解できる。

だがそれは諦めだろうと私は思ってしまった。だってこんなことはどう考えても異常だ、もう何日続いているかも分からないし、正直私もそこに慣れちゃってきた感じはある。だからといって、このまま現状に従うのは絶対にありえなかった。

「私は行かないよ」

「・・・そう」

「マキノが今つるんでる子たちと手を切って私たちの仲間になりたいっていうなら歓迎する。でもそうじゃないなら一緒にには行けない」

「情動的な言い方ね。貴方はもっと冷静に分析ができると思ったけど」

「諦めることを冷静さとは、私は言いたくない」

「・・・私の思考を否定する気？」

私の前でマキノが眉間に手をあてて理解できないと首を振る。やはり彼女は自分の考えに自信があるみたいで、説得は無理そうだ。

「それがデータの的にどんだけ正しいことでも、否定しないといけないってだけ。だっていつかは、この状態を解消しないといけないんだから」

「そんなことが可能だと思っているの？」

「もちろん。だってまだそのリリムスファイアっていうのは誕生してないんでしょ？だいたいことは、現状に抗おうとしている子たちがいる。その子たちが抗うことを諦めた子たちより優位にあるから、この物語は終わっていない」

「時間の問題よ。まったく、ナンセンスな話だわ」

がっかりだと大きくため息をついたマキノが指をパチンと鳴らす。

「!？」

瞬間、視界がゆらぐ。

眩暈の中何度かよろめいて何とか踏みとどまると、さっきまでいた連絡通路とは異なり、なぜか撮影スタジオの中心に私たちは立っていた。

戸惑う私を見てマキノは憐れむような視線を向けてきた。

「諦めない？口ではなんとも言えるわ。でもこんなトリックすら防げない貴方に今から現実を教えてあげる。この特別なステージで」

「これは・・・」

私は彼女が指さす床に敷かれたビニールシートを見て違和感を覚えた。ここにこんなものはなかったはずだ。だとしたら彼女がわざわざ準備したということ。

「自分に有利な場所で戦おうってこと？威勢のわりに弱気じゃない」

「実力を過信して対策を怠るのは賢いとは言わないでしょう。違うかしら」
「それもそうか・・・そこは納得」

でも弱点と言われても自分じゃ分からない、どう対策したら良いものかと考えていると

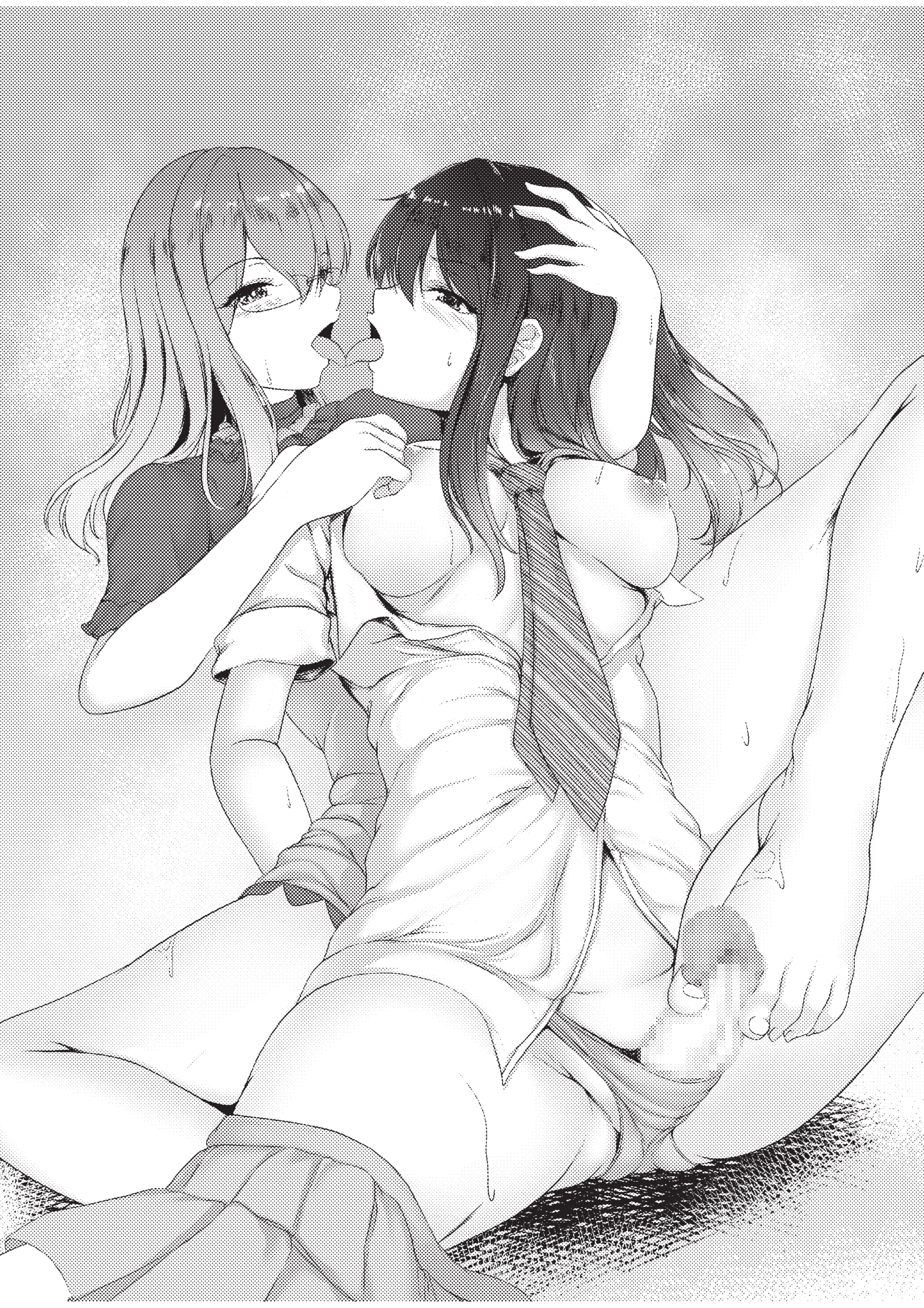
「油断大敵」

「んっ、ちよ、ンむ・・・あぁん!？」

私がおか言おうとしたところに、背中側からマキノの舌が入り込んでくる。抵抗しようと身体を動かそうとするけど、背後から蛇のように絡みついてきて、たくさんの涎を流し込まれる。

(まづい!?)

私が呼吸を入れようとするのを、マキノは逃がさない。ほんの数センチ先で彼女の眉が嬉しそうに歪んでいるのが見えているし、逆に私が困惑しているのが丸見えのはずだ。彼女は私を逃がさないように背後から絡みついたまま床に導くと慣れた手つきでボタンをはずしながら、もう大きくなり始めてたおちんちんに足をのばしてきた。



この状況はあまりに不利すぎる。そう思考は動くのだけど

「んぢゅ、んん・・はあむ・・ん・・フフツ」

「あん、ちよつ、そこ・・むうううう！あ、そこ、ひゃっ！？」

「あむう・・ほら、あちこちお留守よ・・」

「や、だめ、そんなにおちんちんシコシコしないで、やあ、乱暴すぎるう！」

ぎゅんぎゅんと自分のおちんちんが脈打っているのが分かる。意識を強く持たない一気に射精してしまいそうになって、でも与えられる刺激の中で私は踏みとどまるだけで精いっぱいだった。

「ほら、負けちゃいなさい。その乱暴なのが好きなんでしよう？」

「いやあああ、違う、違うのおおおお！？」

「う・そ・つ・き」

「いひいひいひい！？」

いきなり乳首をつままれ、私はメスになってしまふ。その間にもどんどんと精液はせりあがりそうになり、もう歯止めが効きそうにない。

私はぐいとマキノに顔を固定されながら、乳首をねぶられ、脚コキで無様な姿をさらしてしまったまま、

「ダメえ、こんなに早くでちゃう、射精しちゃうのおおおお！！！！！」